

はじめに

2009年に公開された日本の映画に『ジェネラル・ルージュの凱旋』がある。原作は、現役医師であり小説家でもある海堂尊氏による同名の作品。「ジェネラル・ルージュ」は「血まみれ将軍」というところだろうか。誰が「血まみれ将軍」で、なぜそのような呼ばれているのか、等々、作品の内容はともかくとして、私が注目したいのは倫理委員会の場面である。病院が舞台で医療問題を素材としている映画は数多くあり、なかには大学の教授会のシーンがある映画はあっても、倫理委員会が登場する作品を私はほかには知らない。ストーリーの早い段階のシーンで、倫理委員会は研究の倫理審査をしている。しかも、その委員会には、医師だけでなく病院の事務職員や、いわゆる外部委員も構成メンバーとして加わっているという設定だ。

原作者である海堂氏が最新医学に詳しいだけでなく、病院がおかれた昨今の社会的状況にもアンテナを張っていることがわかる。日本の医学部に倫理委員会が設置されたのは1982年の徳島大学医学部が最初とされ、その後の10年間で国内すべての大学医学部および医科大学に倫理委員会が出揃った。これにならって、一般病院等においても同種の委員会の設置が進んだという経緯がある。どれくらいの規模の医療機関にどのような倫理委員会が設置されているのか、法的な裏づけがあるわけではないので正確な統計はないが、個人医院は別として、現在、ある程度大きな病院には倫理委員会があると見ていだろう。また、エンターテインメント系の映画の中に外部委員まで参加した倫理委員会のシーンがあること自体、やはり、時代の流れの反映といえるのではないだろ

うか。ただし、原作でも映画の中でも、いわゆる倫理委員会と、懲罰委員会、あるいはリスクマネジメント委員会とが混同されてははいないか、という点は指摘しておこう。

さて、本書は、生命倫理学を学び始める人、すなわち初学者（ビギナー）向けに編まれた。大学の教養課程で、あるいは専門科目のひとつとして、さらには市民向けの講座やセミナーで……。学ぶ場所やきっかけはさまざまかもしれない。医療現場で何年か仕事をしながら、学生時代に独立した科目として学ぶことがなかった生命倫理学に、はじめて出会うという人もいるかもしれない。

編者は、この「はじめに」を書いている玉井と、「おわりに」で締めつけている大谷である。どちらも大学の教壇に立ち、おもに初学者向けに生命倫理学の講義を展開している。先に述べたような病院の倫理委員会に外部委員として参加し、多種多様な案件について医学・医療の専門家ではないという立場から話し合いに参加するという経験もさせてもらっている。

そうした経験を十分に活かされたかどうかはわからないが、生命倫理学ってなんだろう、という新鮮な気持ちにこたえるべく編集したつもりである。「類書はない」と自画自賛して宣伝したいところだが、その点については実はそうではない、と謙虚に告白しておこう。編者のひとりの大谷が大学ではなく高校の教壇に立っている頃に手がけた『テーマ 30 生命倫理』（教育出版、改訂版 2006 年）がある。何を隠そう私はこの教科書が大変気に入って大学の授業で使っているし、実際ロングセラーとなっている。思えば、それ以上のものをつくりたいと願ってはじめてこの本の編集であった。

しかし、気合いを入れすぎたのがいけなかったのか、編集作業はけっして順調ではなかった。山あり谷ありの編集を支えてくだ

さったのが、コラム執筆者のひとりである白井泰子氏である。白井氏はすべての章に丁寧に通し、的確かつ説得力のあるコメントをくださった。玉井は、信州は安曇野にある彼女の自宅を訪ね（押しかけていき？）、各章へのコメントを聴いた。辛口の指摘にうなり、ときには著者になりかわって反論し、帰路につく頃、家々の明かりが消えた安曇野は星がとてもきれいだった。白井氏の存在がなければ、本書が世に出ることもなかったかもしれない。

そんなふうにしてやっと世の光を浴びることになった本書が、読者のみなさんにとって、生命倫理学とのよい出会いの一助になれば幸いである。

編者を代表して 玉井真理子

執筆者紹介（執筆順，*は編者）

玉井真理子（たまい まりこ）（*） 序 章

信州大学医学部准教授 専攻：心理学

主著：『遺伝相談と心理臨床』（編著）金剛出版，2005年、『遺伝医療と心のケア』日本放送出版協会，2006年。

細田満和子（ほそだ みわこ） 第1章

星槎大学副学長 専攻：社会学

主著：『脳卒中を生きる意味』青海社，2006年、『パブリックヘルス 市民が変える医療社会』明石書店，2012年。

小門 穂（こかどみのり） 第2章

大阪大学大学院医学系研究科特任助教 専攻：生命倫理学

主著：『生殖補助医療における『子を持つという欲望』』『生命倫理』24，2013年，「フランスにおける同性婚合法化と生殖補助医療」『生存学』7，2014年。

渡部麻衣子（わたなべ まいこ） 第3章

東京大学大学院総合文化研究科特任講師（専任） 専攻：科学技術社会論

主著：『遺伝医療と倫理・法・社会』（玉井真理子・福嶋義光編，分担執筆）メディカルドゥ，2006年。

堂園俊彦（どうどの としひこ） 第4章

静岡大学人文社会科学部准教授 専攻：哲学

主著：『入門・医療倫理Ⅱ』（赤林朗編，分担執筆）勁草書房，2007年，「人間の尊厳と公序良俗」『生命倫理』18(1)，2008年。

丸 祐一（まる ゆういち） 第5章

鳥取大学地域学部准教授 専攻：法哲学

主著：「権威と原意」『法哲学年報』vol. 2002，2003年，「サーグッド・マールシャルとケニア憲法草案」『アメリカ法』2009-2号，2010年。

川口有美子（かわぐち ゆみこ） 第6章

NPO法人ALS/MND サポートセンターさくら会理事

主著：『逝かない身体』医学書院，2009年，『在宅人工呼吸器ポケットマニュアル』（共編）医歯薬出版，2009年。

出口泰靖（でぐち やすのぶ） 第7章

千葉大学文学部准教授 専攻：医療社会学

主著：『老いと障害の質的社会学』（山田富秋編，分担執筆）世界思想社，2004年，『ケアすること』（上野千鶴子ほか編集委員，分担執筆）岩波書店，2008年。

田代志門（たしろ しもん） **第8章**
国立がん研究センター社会と健康研究センター生命倫理研究室室長 専攻：医療社会学
主著：『過去を忘れない』（桜井厚ほか編，分担執筆）せりか書房，2008年，『研究倫理とは何か』勁草書房，2011年。

大谷いづみ（おおたに いづみ）（*） **第9章**
立命館大学産業社会学部教授 専攻：生命倫理学
主著：『死生物学とは何か』（島蘭進・竹内整一編，分担執筆）東京大学出版会，2008年，『ケアという思想』（上野千鶴子ほか編集委員，分担執筆）岩波書店，2008年。

金 亮完（きむ やんわん） **第10章**
山梨学院大学大学院法務研究科教授 専攻：民法
主著：「生殖補助医療への保険適用をめぐる諸問題」『比較法学』38（3），2005年，『基本判例4 家族法』（本田純一・棚村政行編，分担執筆）法学書院，2005年。

下地真樹（しもじ まさき） **第11章**
阪南大学経済学部准教授 専攻：経済学
主著：「批判的合理主義の正義論」『情況』5・6月号，2006年，「性的自由と買売春」『女性学』14，2007年。

堀田義太郎（ほった よしたろう） **第12章**
東京理科大学理工学部講師 専攻：倫理学
主著：「ケアと市場」『現代思想』36（3），2008年，「英国レスリーパーク裁判から学べること」『生存学』1，2009年。

香川知晶（かがわ ちあき） **第13章**
山梨大学大学院医学工学総合研究部教授 専攻：哲学
主著：『死ぬ権利』勁草書房，2006年，『命は誰のものか』ディスカヴァー・トゥエンティワン，2009年。

土屋貴志（つちや たかし） **第14章**
大阪市立大学大学院文学研究科准教授 専攻：倫理学
主著：『The Oxford Textbook of Clinical Research Ethics』（E. Emanuelほか編，分担執筆），Oxford University Press，2008，『先端医療の社会学』（共

編)世界思想社, 2010年。

Column 執筆者

加藤尚武 (かとう ひさたけ) Column ①
京都大学名誉教授 専攻: 哲学
主著: 『現代倫理学入門』講談社学術文庫, 1997年。

柘植あづみ (つげ あづみ) Column ②
明治学院大学社会学部教授 専攻: 医療人類学
主著: 『妊娠を考える』NTT出版, 2010年。

渡邊 淳 (わたなべ あつし) Column ③
日本医科大学付属病院遺伝診療科ゲノム先端医療部部長
主著: 『トンプソン&トンプソン遺伝医学』(福嶋義光監訳, 翻訳)メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2009年。

増井 徹 (ますい とおる) Column ④
独立行政法人医薬基盤研究所難病・疾患資源研究部部長 専攻: 生物資源政策
主著: *Human Genetic Biobanks in Asia* (M. Sleeboom-Faulkner 編, 分担執筆), Routledge, 2008。

白井泰子 (しらい やすこ) Column ⑤
前・国立精神・神経センター精神保健研究所所長 専攻: 医療社会心理学
主著: 『スピリチュアリティといのちの未来』(島蘭進・永見勇監修, 分担執筆)人文書院, 2007年。

泉 清隆 (いずみ きよたか) Column ⑥
わんびーすヘルパーステーション代表
主著: 『やさしさのまほう』(絵: 326) PHP 研究所, 2008年。

岩元 綾 (いわもと あや) Column ⑦
いのちと心をつなぐネットワーク「えほんの会 AYA」
主著: 『21 番目のやさしさに』かもがわ出版, 2008年。

橋本秀雄 (はしもと ひでお) Column ⑧
三重大学非常勤講師
主著: 『性分化障害の子どもたち』青弓社, 2008年。

佐伯恭子 (さえき きょうこ) Column ⑨
千葉県立保健医療大学健康科学部助教 専攻: 看護学

- 野崎泰伸 (のざき やすのぶ) Column ⑩
立命館大学非常勤講師 専攻：哲学
主著：『生の無条件の肯定』に関する哲学的考察」(博士論文)
- 島蘭 進 (しまどの すすむ) Column ⑪
東京大学大学院人文社会系研究科教授 専攻：宗教学
主著：『宗教学の名著 30』筑摩書房，2008 年。
- 安藤泰至 (あんどう やすのり) Column ⑫
鳥取大学医学部准教授 専攻：宗教学
主著：『生命の産業』(佐藤光編，分担執筆) ナカニシヤ出版，2007 年。
- 武藤香織 (むとう かおり) Column ⑬
東京大学医科学研究所教授 専攻：社会学
主著：“Organ Transplantation as a Family Issue,” *International Journal of Japanese Sociology*, 19 (1), 2010.
- 最相葉月 (さいしょう はづき) Column ⑭
ノンフィクションライター
主著：『星新一 一〇〇一話をつくった人』(上・下) 新潮文庫，2010 年。
- 松原洋子 (まつばら ようこ) Column ⑮
立命館大学大学院先端総合学術研究科教授 専攻：科学史
主著：『優生学と人間社会』(共著) 講談社，2000 年。
- 山本龍彦 (やまもと たつひこ) Column ⑯
慶應義塾大学法科大学院教授 専攻：憲法学
主著：『遺伝情報の法理論』尚学社，2008 年。
- 樋口範雄 (ひぐち のりお) Column ⑰
東京大学大学院法学政治学研究科教授 専攻：英米法
主著：『医療と法を考える』有斐閣，2007 年。

目 次

序 章 答えの出ないことを考え続けるために Ⅰ

生命倫理学という学問

- 1 生命倫理学と聞いて何を思うか? …………… Ⅰ
- 2 障害のあるわが子を背負って田んぼに
駆けつけることはしないという選択 …………… 4
- 3 映画『ジョン Q』から …………… 8
- 4 各章のめざすところ …………… 13

第 1 章 生命倫理はどこから来て、どこへ向かうのか? Ⅰ9

生命倫理の歴史と日本への導入

- 1 アメリカにおけるバイオエシックス …………… 20
医師・医学研究者の不信 20 医の倫理の監視者 22
バイオエシックスの（ひとまずの）確立 24
- 2 日本における生命倫理 …………… 26
バイオエシックスの輸入 26 生命倫理の展開 26
- 3 今日のバイオエシックス／生命倫理学 …………… 28
バイオエシックスの課題 28 それぞれのバイオエシ
ックス／生命倫理 30

第2章 身体から切り離された精子・卵子・受精卵 37

生殖補助技術が問いかける親子の絆

- 1 生殖補助技術とは 38
妊娠を助ける医療技術 38 親子関係へのさまざまな影響 40
- 2 生殖補助技術の利用が引き起こした混乱 43
カップル解消後の生殖補助技術 43 提供精子を用いた人工授精と出自を知る権利 45
- 3 代理出産と親子関係 46
5人の「親」？：産みの母と育ての母の乖離 46 法的な親子関係はどうなるのか？ 47
- 4 どのような技術を誰が利用できるか 49
●生殖補助技術に対する規制
- 5 生殖補助技術が問いかけるもの 53
残される課題 53 重要な当事者である子どもへの視点 55

第3章 選ぶ技術・選ぶ人 61

出生前診断のもたらす問い

- 1 出生前診断とは何か 63
法律と現実 63 出生前診断の登場と社会の対応 64
- 2 出生前診断の投げかける問い 67
出生前診断の経験 67 障害のあることは不幸か？ 69

3	もうひとつの選択	71
	障害を受けられるという選択	71 結びに 73

第4章 「夢の技術」を立ち止まって考える 79

再生医療

1	広がる再生医療	80
	自分の細胞で治す：再生医療の現状	80 高い能力をもつ細胞の登場 81
2	どのような細胞なら入手することが許されるのか ...	82
	ヒト胚の破壊は許されるか	83 卵子の提供が女性に与える影響 84 死亡胎児の利用 85
3	どのように細胞を利用できるのか	87
	移植した細胞の「がん化」	87 クローン人間をつくることは認められるか 88 ヒトと動物を混ぜることはどこまで許されるか 90 精子・卵子の作成をめぐる問題 92
4	夢を悪夢にしないために	93

第5章 知りたいのはどんな情報ですか？ 97

診療と研究参加のインフォームド・コンセント

1	生きたい人生を生きるために	98
	インフォームド・コンセントはムンテラではない！	98
	インフォームド・チョイス	99

2	インフォームド・コンセント ……………	100
	● 2つの歴史的源泉	
3	診療におけるインフォームド・コンセント ……………	101
	● 自己決定のために	
	裁判で生まれたインフォームド・コンセント 101 診療におけるインフォームド・コンセントはどうすれば有効なのか 103 同意能力がない人からは同意を受けられない 103 同意能力がない／不十分な場合は誰が治療を決定するのか 104 何をどの程度説明すれば「十分」か 105 倫理的な義務と法的な義務 106 患者が本当に説明を理解しているのか誰もわからない 107 自発的な同意 108	
4	医学研究におけるインフォームド・コンセント ……	109
	● どうすれば被験者を保護できるか？	
	ナチス・ドイツの人体実験とニュルンベルク綱領 109 研究への参加は参加者の利益となるか 110 研究の特殊性と合理的なボランティア基準 111	
5	包括的同意 ……………	113
	● 「その胃をください」	
	使用目的を特定しない同意 113 インフォームド・コンセントは万能ではない 115	

第6章	患者主体の医療	119
------------	----------------	-----

難病 ALS の立場から

1	治らない病いを生きる ……………	120
	ALS という病い 120 人工呼吸器に対する印象の変化 121	

2	家族との関係	122
	家族の選択	122
	ある女性 ALS 患者のケース	123
	生きようよ, といえない家族	125
3	治療を継続するためのしくみ	126
	難病の定義	126
	患者の自己決定にゆだねない	128
4	伝える努力, 読み取る技術	129
	「患者の語り」を医療に活かす	129
	自己決定とアドバンス・ディレクティブ (事前指示書)	130
	意思を伝えること/読み取ること, を超えて	131
	患者主体の医療のために	133

第7章 「老いて介護されること」とは 141

介護される者の自己決定

1	老いて介護される者の自己決定	142
	老いて介護される者の自己決定の尊重	142
	「本人の自己決定を尊重」といっても……	143
	本人の真意はどこにあるのか?	144
2	本人の意思を尊重するのが困難な介護現場	145
	「これとってくれませんかねぇ」	145
	本人の意思が尊重されない介護現場の難しさ	146
	身体拘束・抑制は人手不足のためなのか	147
	「どうせ本人はわからないから」?	149
3	なぜ「老いて介護される」ことに背を向けたいのか? …	150
	老いて介護されることへのまなざし: ピンピンコロリと健康寿命	150
	高齢者の延命医療制限	151
	「他人の力はかりない=自分の力で」という自立観	153
	助けられ上手さん	153
	「プライドの危機」と「心の貸借対照表」	155
	「他者と関係を築こうとする」自立観	156

- 4 「する」としての老い、「ある」としての老い …… 157
「する」としての老い、「ある」としての老い 157 「介
護される」ことを「ある」という視点から学ぶ 158

第8章 最期まで生きるために 167

ホスピス・緩和ケアの現場から

- 1 ホスピス・緩和ケアとは …… 168
- 毎日をフルに生きる
長く、太く生きる 168 「生」を支えるホスピス・緩和
ケア 169 生活の質（QOL）の向上 170
- 2 近代ホスピス運動の誕生 …… 171
- 全人的苦痛を癒す
ホスピス運動の創始者 シシリー・ソングース 171 ホ
スピス運動の社会的背景 172 安楽死運動との対決
173 全人的な痛み 174 世界標準の緩和ケアへ
176
- 3 日本におけるホスピス・緩和ケアの展開 …… 176
- 「家で死ぬこと」を実現するために
緩和ケア病棟の制度化 176 施設から地域へ 177
在宅の「魔力」 178 在宅ホスピスの課題 180
- 4 現代の看取りと死生観 …… 181
- 死の現場を社会にかえす
看取り文化の再構築 181 死にゆく人から学ぶ 182

第9章 「自分らしく、人間らしく」死にたい? 187

安楽死・尊厳死

- 1 安楽な死、尊厳ある死? 188
- 2 安楽死・尊厳死論の歴史 190
前史 190 「価値なき生命」の殺害 191 「慈悲によってもたらされる死」から「尊厳をもって自ら選ぶ死」へ
193 日本の安楽死・尊厳死論 197 緩和ケアの発達
と安楽死・尊厳死論 199
- 3 社会的な文脈を読む 200
医療の中に組み込まれる安楽死・尊厳死? 200 権利
と義務の錯綜 201 「自分らしい、人間らしい、尊厳あ
る死」を望む「私」とは何ものか 203

第10章 人の死をめぐるジレンマ 211

脳死・臓器移植問題が私たちに問いかけるもの

- 1 もうひとつの死 213
●脳死
「脳死」とは何か 213 脳死の登場：脳死と臓器移植の
接点 215
- 2 日本の脳死・臓器移植議論と改正臓器移植法 216
臓器移植法成立までの議論状況 216 臓器移植法改正
の背景と経緯 218 09年法の主な内容と意味 220

- 3 脳死・臓器移植問題が私たちに問いかけるもの** ……226
脳死を人の死とすることへの疑義 226 臓器移植をめぐる問題 227 臓器不足は解消するか? 228 結びに代えて 230

第 11 章 医は仁術? 算術? 235

医療資源の配分と倫理

- 1 医療資源の配分問題とは** …………… 236
限られた資源の使い道を決める 236 なぜ問題になってきたのか 236
- 2 「神の委員会」** …………… 237
人工腎臓の発明 237 新たな問題と「神の委員会」239 手続きがみたすべき要件 239
- 3 さまざまな選別基準を検討する** …………… 241
より大きな功績をあげた人を優先する 241 より大きな効果が得られる人を優先する 242 個人間比較の問題 242 より多く支払う人を優先する 245 すべての人に等しい機会を与える 245
- 4 創造的に問題に取り組む** …………… 246
全員を助けることだけが正しい 246 より広い視点から問いを見直す 247

第12章 強く・美しく・賢く・健康に？ 253

エンハンスメントと新優生学

- 1 バイオテクノロジーによる願望の実現 …………… 254
 - エンハンスメントと新優生学
 - 医療技術で願望を実現すること 254 エンハンスメント／新優生学とはなにか 255
- 2 エンハンスメント問題の背景と構造 …………… 256
 - 医療の目的と範囲：その限定と拡大 256 治療の範囲のあいまいさ 257
- 3 エンハンスメントを問う視点 …………… 259
 - 願望の背景にある圧力：「目的」に含まれる問題 259
 - 身体に対する負担：「手段」にともなう問題 260 社会的圧力も身体的負担もない場合 262 自由と責任／個人と社会 264
- 4 よりよい性質の子どもをデザインすること …………… 265
 - どんな技術なのか 265 実験段階での問題点：コストとリスク 267 遺伝子操作がめざすもの 268 障害はないほうがよい＝除去したほうがよいのだろうか 269
 - プラスの機能 270 おわりに 272

第13章 人間はどこまで機械なのか 277

脳神経倫理

- 1 脳神経倫理の登場 …………… 278
 - 「脳神経倫理：領域を画定する」(2002年) 278 モンスターあるいはロボコップの哲学 279

2	脳神経倫理, その構想	281
	ロスキーズの構想	281
	脳科学の倫理と倫理の脳科学	282
	実践の倫理	282
	神経科学の倫理的含意	284
	倫理の神経科学	285
3	収斂する科学技術への問い	287
	NBICテクノロジーの統合	287
	エンハンスメント,	
	人間への問い	288

第14章 軍事医学研究はどこまで特殊か 293

戦争と医学研究倫理

1	日本人による反人道的医学研究	294
	駐蒙軍冬季衛生研究	294
	15年戦争期の日本による医学犯罪	297
	731部隊におけるコレラワクチン実験	298
	九州帝国大学医学部「生体解剖」事件	298
2	ナチス・ドイツの医学犯罪	299
3	米国の放射線被曝人体実験	303
4	戦時と平時の医学研究倫理	305
	反人道的軍事医学研究を正当化する論理	305
	平時と戦時は連続している	307
おわりに		313
章扉図版出所一覧		316
索引		317

- ①環境と生命倫理 35
- ②ジェンダーと生命倫理 59
- ③遺伝情報を診療で活用するための課題 77
- ④バイオバンク 96
- ⑤倫理委員会 118
- ⑥ALS とともに生きる 137
- ⑦夢紡ぎつつ, 明日へ 138
- ⑧インターセックス 139
- ⑨看護と生命倫理 164
- ⑩障害学と生命倫理 165
- ⑪死生学と生命倫理 186
- ⑫宗教と生命倫理 209
- ⑬生体からの臓器移植 234
- ⑭生命倫理とジャーナリズム 251
- ⑮優生学と生命倫理 275
- ⑯犯罪捜査と DNA 292
- ⑰法律と生命倫理 312

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

索引

◆アルファベット

- ADL (日常生活動作) 130
ALS (筋萎縮性側索硬化症) 120, 137
BCI 288
BMI →ブレイン・マシン・インターフェース
DNA 鑑定 292
EBM (エビデンス・ベースド・メディスン) 129
EG 細胞 →胚性生殖細胞
ES 細胞 →胚性幹細胞
fMRI (機能的磁気共鳴画像) 278, 283, 284
iPS 細胞 →ヒト人工多能性幹細胞
NBIC テクノロジー 287
NBM (ナラティブ・ベースド・メディスン) 129
QALY 242-44
QOL (生活の質, 生命の質) 121, 129, 148, 170, 179, 193, 242

◆あ行

- 青い芝の会 70, 71
アドバンス・ディレクティブ (事前指示書) 124, 130
安楽死 128, 188, 190, 302
——の分類 189
安楽死運動 173
安楽死法制化 174
安楽死法制化運動 191, 192, 195, 198
医学研究 100, 109, 294
医学研究倫理 294, 303, 308
医学実験 21, 294

- 医学的無益 201
医学の公益性の論理 306, 307
医学犯罪 297, 308
石井機関 297, 298
医師裁判 300
意思伝達装置 121, 132
医師の裁量権 201
移植ツーリズム 219, 228, 234
イスタンブール宣言 219, 228, 234
遺伝子差別 292
遺伝子診断 77
遺伝子操作 265-68, 270, 271
遺伝情報 77
遺伝性疾患 268
医療化 172, 260, 270
医療資源の配分問題 236, 237, 246, 247
医療政策 248
医療保険 126
医療倫理 (学) 190, 294
インフォームド・アセント 105
インフォームド・コンセント 23, 24, 82, 98, 228
研究参加の—— 109
診療における—— 101
インフォームド・チョイス 99
インフォメーション・テクノロジー 287
嘘発見サービス 285
エアランゲン事件 226
エンギッシュ, K. 189
エンハンスメント 254-56, 266, 281, 288, 289
延命治療 168
老い 157

◆か行

介護 142
科学ジャーナリズム 251
科学的妥当性 93
学際 3
『ガタカ』 292
カプラン, A. 29
神の委員会 237, 239, 241, 248
カレン・アン・クインラン裁判
188, 193, 195, 196
環境問題 35
環境倫理(学) 35, 294
患者会 127
患者主体の医療 133
患者の権利 23
患者の自己決定 102, 128, 195
間接的安楽死 189, 192
管理医療(マネジド・ケア) 28
緩和ケア 169, 186, 199
緩和ケア病棟 176, 177
基礎死生学 186
キャラハン, D. 24, 151
究極の選択問題 7
究極のプライバシー 284, 292
キューブラー=ロス, E. 183, 199
近代ホスピス運動 171, 176
くさび論 → 滑りやすい坂論
クブラバリ 7
クローン規制法(ヒトに関するクローン
技術等の規制に関する法律)
88
クローン胚 81, 84, 88
軍事医学研究 305
健康寿命 151
公益至上主義の論理 306, 307
高齢者虐待 149
高齢者の尊厳を支えるケア 142
高齢者福祉 126
心の哲学 286

コミュニケーション障害 132

◆さ行

最首悟 4
再生医学 80
再生医療 80, 87
在宅人工呼吸療法 121
在宅ホスピスケア 178, 180
差別 259
ジェンダー 59
死刑執行人の論理 306, 307
自己決定 133, 144, 153, 156, 160, 201,
227, 257
——の尊重 142, 156
自己決定権 63, 256
死後生殖 42
死後認知 44
自己否定 204
自殺幫助 128, 190
死生学 186
死生観 182, 209
施設内審査委員会(IRB) 23, 118
事前指示 104
事前指示書 → アドバンス・ディレク
ティブ
死に関する宣言(シドニー宣言)
216
『死ぬ瞬間』 183
死の自己決定 133, 173
自発的安楽死 196
社会的有用性 241
重度身体障害者 131
終末期医療の決定プロセスに関するガ
イドライン 128
種差別 91
出自を知る権利 45, 46
出生前診断 63, 64, 77
種の尊厳 91
障害学 165
障害者自立支援法 127

- 障害者福祉 126
 障害の社会モデル 71
 消極的安楽死 189, 192, 196
 承諾意思表示方式 222
 広義の—— 222, 223, 229, 231
 『ジョンQ』 8
 自立 153, 156, 160
 自律尊重原則 143, 144
 シンガー, P. 230
 人格 83, 86, 209
 神経科学 278
 人工呼吸器 120-23
 人工呼吸器停止 128
 人工授精 38-40
 人工妊娠中絶 49, 59, 63, 68, 83
 心臓死 212
 身体拘束・抑制 147, 148
 人体実験 27, 257, 298
 新優生学 254, 255, 265, 275
 スウェーデン病院 238, 239
 スコトコ, B.G. 72
 スパゲティ症候群 195
 滑りやすい坂論 (スリッパ・スロー
 プ) 12, 229
 生活の質 → QOL
 生殖技術 27
 生殖系列細胞遺伝子操作 265, 267
 生殖ツーリズム 53
 生殖の自由 255, 271
 生殖補助技術 38, 40, 92
 成体幹細胞 80
 生体臓器移植 234
 成年後見制度 143
 生命の質 → QOL
 生命倫理 26
 ——の四原則 8, 24, 30, 142
 生命倫理学 2, 8
 生命倫理法 (フランス) 50
 セカンドオピニオン 100
 積極的安楽死 189, 192, 200
 説明原則 102
 セデーション (鎮静) 200
 遷延性意識障害 104, 193, 214
 善行原則 142, 143
 全人的な痛み 174, 175
 全人的なケア 173
 戦争犯罪 308
 戦争倫理学 294
 選択的中絶 266
 臓器移植法 (臓器の移植に関する法
 律) 212, 218
 臓器移植法 (1997年) 220, 223
 臓器移植法 (2009年) 220, 223, 225,
 227, 228, 231
 臓器移植法改正 218
 臓器提供意思表示カード 222
 臓器取引と移植ツーリズムに関するイ
 スタンブル宣言 → イスタンブ
 ール宣言
 「臓器の移植に関する法律」の運用に
 関する指針 (ガイドライン)
 218, 234
 組織幹細胞 (TS細胞) 80
 尊厳ある死 173, 202, 204
 尊厳死 188
 ソンダース, S. 171, 174, 199
 ◆た 行
 体外受精 27, 38-40, 43, 50, 267
 代理出産 (代理懐胎) 42, 46, 52
 代理母 46
 代理判断 (代諾) 104
 ダウン症 138
 竹内基準 27, 217
 タスキギー事件 22, 23, 111
 脱病院化 177
 「血のつながり」 40, 53
 着床前診断 77, 266
 長期人工呼吸療法 127
 長期脳死 226

治療 256-58, 266, 289
チルドレス, J. F. 8, 24, 30
つなぎ服 145, 146
提供精子・卵子・受精卵 40
デイホスピス 178
哲学 2
同意原則 102
同意能力 103
冬季衛生研究 295, 297, 305
トゥルオグ, R. D. 230
トゥングダ 7
特定疾患 127
ドナー 212
トレードオフ 236

◆な行

ナチス・ドイツ 109, 191, 192, 275,
299
731部隊 27, 297, 298
ナノテクノロジー 287
『檀山節考』 198, 205
難病事業 126
難病対策要綱 127
日本 ALS 協会 127
日本型在宅ホスピス 180
日本尊厳死協会 189
日本の安楽死・尊厳死論 198
ニュルンベルク綱領 22, 110, 303
ニュルンベルク裁判 191, 299
人間の尊厳 93, 196, 292
妊娠中絶法 (イギリス) 64
認知症高齢者 146
脳科学研究 279
脳画像 278, 284
脳死 27, 212
脳死状態 212
脳死臨調 218
脳神経倫理 278, 279

◆は行

胚移植 38
バイオエシックス 2, 24, 25, 29, 30
英語圏の—— 209
バイオテクノロジー 272, 287
バイオバンク 96, 114
配偶子 (精子・卵子) 44
唄孝一 102
胚性幹細胞 (ES 細胞) 81, 92
胚性生殖細胞 (EG 細胞) 81, 85
パーソン論 229
バターナリズム 122, 123
発症前遺伝子診断 77
ハーバード基準 216
反自発的安楽死 196
反対意思表示方式 222, 229
非自発的安楽死 196
ピーチャー, H. 20
ピーチャム, T. L. 8, 24, 30
ピッツバーグプロトコル 229
ヒト人工多能性幹細胞 (iPS 細胞)
82, 87, 93
ヒト胚 83
非配偶者間人工授精 45, 55
病院倫理委員会 24, 118
ピンピンコロリ 150
フォックス, R. 29
不幸な子どもの生まれない対策室
69
不妊 38
普遍主義 30
ブライバシー 113, 114, 118, 194
『フランケンシュタイン』 280
ブルトニウム注射実験 303
ブレイン・マシン・インターフェース
(BMI) 132, 288
文化横断的 31
ベビー M 事件 49
ヘルシンキ宣言 110

ベルモント・レポート 23, 25, 30,
118

包括的同意 113, 114

放射線被曝人体実験 303

ホスピス 171

ホスピス・緩和ケア 169, 170

母体血清マーカー検査 64, 66

母体保護法 63, 86

ポッター, V. R. 2, 25

ポリグラフ 284

◆ま 行

マクロの配分問題 248

マスキリング 66

マテイ, J.-F. 54

マネジド・ケア →管理医療

ミクロの配分問題 247

看取りの文化 181, 183

ムンテラ 98

「もったいない」の論理 306, 307
モンスターあるいはロボコップの哲学
281

◆や 行

優生学 255, 275

優生保護法 63

予 防 266

◆ら・わ行

ラザロ徴候 226

卵子提供 50

リプロダクティブ・ライツ 275

臨床死生学 186

倫理委員会 93, 118

倫理審査委員会 111, 113

レシピエント 212

ロスキーズ, A. 281

和田心臓移植事件 217

● 編者紹介

玉井真理子 (たまい まりこ)

信州大学医学部准教授

大谷いづみ (おおたに いづみ)

立命館大学産業社会学部教授

はじめて^{であ} ^{せいめいりんり} 会う生命倫理
Introduction to Bioethics

ARMA



有斐閣アルマ

2011年3月5日 初版第1刷発行

2017年1月30日 初版第9刷発行

編者 玉井真理子
大谷いづみ
発行者 江草貞治
発行者 株式会社 有斐閣

郵便番号 101-0051
東京都千代田区神田神保町2-17
電話 (03)3264-1315〔編集〕
(03)3265-6811〔営業〕
<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・株式会社理想社／製本・複製本印刷株式会社

© 2011, M. Tamai, I. Otani. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-12420-2

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。